

社会福祉・ソーシャルワークからの「災害論」の検討

—アメリカにおける議論をもとに—

東北学院大学 氏名 渡邊 圭 (8022)

キーワード3つ: 災害論、災害福祉、災害時ソーシャルワーク

1. 研究目的

本研究では、社会福祉・ソーシャルワークの分野/領域より「災害」をどのように捉えるべきか検討し、「災害論」を構築することを目的としている。

2011年に発生した東日本大震災を受け、日本学術会議社会学委員会社会福祉学分科会より2013年5月2日に出された提言『災害に対する社会福祉の役割—東日本大震災への対応を含めて—』では、「災害時における社会福祉のあり方を理論的に確立し、教育課程に反映させることが大きな課題となっている。」(日本学術会議社会学委員会社会福祉学分科会 2013: iii)と指摘がなされており、「災害支援論」を社会福祉学の領域で学術的に確立する必要があるとの提言と、それにむけた課題の整理をしている。

社会福祉、ソーシャルワークからの災害対応については、先述の提言においても指摘されている様に過去の歴史災害時の経験や教訓が活かされる形で近年、その活動記録を基にした災害時ソーシャルワークの理論化及び教育方法の検討(社会福祉士養成校協会 2015, 野口 2016, 遠藤 2018, 河野・三上・平岡ほか 2020 など)や災害直後の支援を担う災害派遣福祉チーム(DWAT)の体制構築(畠山 2013, 富士通総研 2013, 山館 2014, 狩野 2015 など)や育成に関する検討(都築 2018, 富士通総研 2020, 武田康晴 2021 など)に関する調査研究への取り組みがなされている。

しかしながら、これらの「災害」を冠する様々な議論においては、そもそも社会福祉・ソーシャルワークが「災害」をどの様に定義するのかについて言及がなされていない。そのため本研究では、今後の「災害福祉」ないし「災害ソーシャルワーク」の体系化や先述の提言にあるような「災害支援論」の確立に向け、社会福祉・ソーシャルワークの分野/領域から「災害」をどの様に捉えるべきかの「災害論」の構築に取り組む。

2. 研究の視点および方法

日本の社会科学領域における災害研究の遍歴について、日本では、個々の出来事(関東大震災、阪神・淡路大震災、東日本大震災など)や、特定の種類の事象(地震、台風、津波など)を越える形でのより一般化した形での「災害」研究は、第二次大戦後といえるが、公刊されている文献の数は少なく、時期も限られており、藤井による「防災科学を垂流の科学として軽視する考えがある」(藤井 1977: 330, 340-341)という指摘にもあるように「社会科学からのアプローチの弱さ」と「災害現象の解明そのものが絶対的に遅れている」ことがあると考えられる。1980年代以降に関しては、阪神淡路大震災の被災地域でもある関西圏の大学を中心として、アメリカのオハイオ州立大学のDRC(Disaster Research Center)やコロラド大学のNHC(Natural Hazard Center)と関係も持った社会心理学や社会学の専門家を中心とする研究が集中的に蓄積されているが、東日本大震災の発災まではそれぞれの領域においても「災害」はマイナーなテーマであった(この点は、社会福祉系の諸学会においても災害を冠する分科会が常設されたのは東日本大震災以降であることからマイナーなテーマであったことが分かる)。

このような日本における社会科学領域からの災害研究の背景を踏まると、「災害論」の検討・構築—「災害とは何か」という問い—とは、単に「災害」という用語の定義の問題ではない。「災害」と符丁される現象—その諸特性、諸条件、諸帰結—を捉えるための概念枠組みとして何が重要だとして焦点化するのか、また、ある現象を「災害」として捉えるための区分に関連する「災害の概念的構成(Rubric of Disaster)」がどのような基準で組み立てられるべきかに向けて明確なビジョンを設定する作業を必要とする。

そのため、本研究では、文化的な被拘束性の問題はあがあるが、「災害とは何か」を追求し続けたE. L. Quarantelliの議論及びDisaster and Social Work Researchにおける災害論—災害現象の概念化—に関する2つの理論展開—“Vulnerability”・“Resilience”—に着目し、日本の社会福祉・ソーシャルワーク分野/領域において災害論の検討・構築向け、どのような示唆が得られるか諸議論のレビュー及び論点整理の作業を行う。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守し、引用・参考文献等の明記を行った。

4. 研究結果

Quarantelli は、「日本は例外である。日本には個別事例についての多くの経験的研究があるが、その国では理論的な仕事は顕著ではない」(Quarantelli 1998:6)と、日本の社会科学領域からの災害研究に対して批判的な指摘を行っている。このQuarantelliは、災害にとって意味があるのは、作用因(hazard)でもなく、物理的な時と場所でもなく社会的なものであるとており、災害をその重篤度に沿って「緊急事態(crisis)」「災害(Disaster)」「大災害/大惨事(catastrophes)」と区別し、それぞれにおける被害状況や諸対応への相違について指摘している(Quarantelli 2000, Quarantelli 2005)。

Disaster and Social Work Researchについて概観していくと、Zakour (2016)の指摘やEncyclopedia of social workの記載からも見て取れるように、ソーシャルワークは歴史的にみても災害発生時の救助を提供してきた事実はあるが、そこでの災害研究は残余的であったとの指摘がある。しかしながら、1990年代より単独かつ単一の理論ではなく、様々な分野における諸理論及び様々な実践における経験値の合成からソーシャルワークにおける災害研究が推進され、2004年のハリケーンカトリーナの生起を背景として「脆弱性(Vulnerability)」「レジリエンス(Resilience)」に焦点をあてるアプローチがソーシャルワークの災害研究として体系化されてくる。脆弱性理論における諸変数は、社会資本、人的資本に加え、コミュニティの能力の基礎にある様々な資本や適応を助けるための有形・無形の諸資源を含むとし、レジリエンス理論は、レジリエンスを「過程」とし、個人の人生上のネガティブな出来事、トラウマ、ストレス、リスクに対する適応として捉えていくことについて言及している。

一方、アメリカの全米ソーシャルワーカー協会(National Association of Social Worker)が編集するEncyclopedia of social work 20th edi.ではDisaster(災害)の項目が設けられ、各種の先行研究(Fritz1961, Cutter1992, Barton1969, Quarantelli1998)の定義を踏まえ災害と緊急事態や事故との相違についても着目しつつ、災害を「多くの人々に同時に影響を与え関与や混乱緒度合いが大きい。災害は大きな苦難と損失を伴う」(Gillespie 2008:60-65)とし、災害を3つに類型化—自然災害、技術災害、相乗災害—しており、それらを踏まえ、災害時のソーシャルワークの役割について言及している。

5. 考察

我が国において「災害」を扱う際に、最も多く引証されるものは、災害対策基本法における定義であり、そこでは、災害を「暴風、竜巻、豪雨、豪雪、洪水、崖崩れ、土石流、高潮、自身、津波、噴火、地滑りその他の異常な自然現象又は、大規模な火事若しくは爆発その他その及ぼす被害の程度においてこれらに類する政令で定める原因により生ずる被害をいう。」(災害対策基本法第一章第二条一)と定義している。現行の日本の社会福祉・ソーシャルワークでは、「災害」をこの災害対策基本法の定義を援用する形で自然災害に限定化し、発災により被災者、災害時要援護者、地域社会に対して生活困難や生活への不可逆的な困難をもたらすものとして捉えている。このことから、「災害」をめぐる議論については、個々の「災害」の作用因の規模とそれがもたらす被害の程度をどの様に定義するかには焦点化していると考えられおり、「災害」の定義にどのような諸概念が関わっているかまでは言及されていないという課題があると指摘できる。

本研究において、アメリカの諸議論より、「災害」という出来事は、その「作用因」ではなく、その重篤度の相違はあるものの人の生存と地域社会に対する複合的なプロセスを有した社会現象として捉える必要があると考えられる。また、仮に災害福祉、災害時ソーシャルワーク、災害支援論などの体系化を図るのであれば、なおのこと、冠する「災害とは何か」の議論は避けて通れないものであるといえ、その議論を経たうえで、社会福祉、ソーシャルワークの役割が位置付けられると考えられる。

参考文献一覧

藤井陽一郎(1977)『環境と災害：防災への提言』文新社。

Gillespie D.F.(2008) "Disaster" in Terry Mizrahi, Larry E. Davis, editors in chief Encyclopedia of social work 20th edi, Oxford University Press, 60-65.

Quarantelli E.L.(1998) "Introduction : The basic question, its importance and how it is addressed in this volume" in E.L.Quarantelli ed. What is a disaster : perspectives on the question, Routledge, 1-7.

Quarantelli, E.L.(2005) "Catastrophes are different from disasters : some implications for crisis planning and managing drawn from Katorina", DRC University of Delaware.

Zakour M.J. (1997) Disaster Research in Social Work, Journal of Social Service Research, 22(1-2), 7-25.